近世社会と差別の中で生き抜いてきた人々

1　目　標

（1）江戸時代は、民衆の中に中世以来の賤視観があり、制度的にも身分差別が確立されていった社会である。その中でたくましく生きてきた人々の姿に気づくことができる。

（2）近世の身分社会の中で、差別されていた人々がさまざまな仕事を生み出し、社会や文化を支え、大きな役割を果たしてきたことに気づく。

2　学習計画〈全2時間〉

（1）江戸時代の身分社会と差別の中で生きてきた人々（1時間）

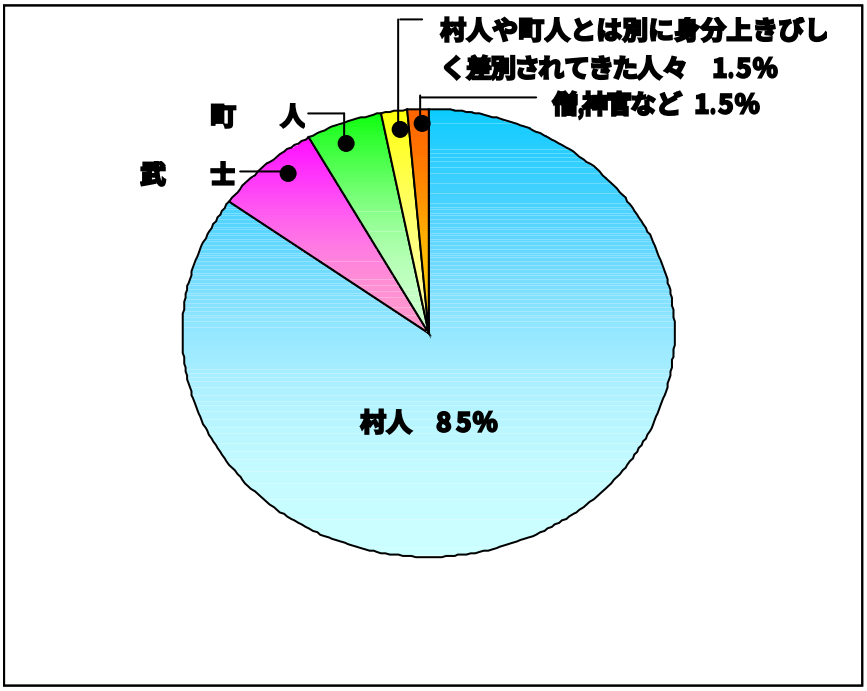
（2）江戸時代の社会や文化を支えてきた人々（1時間）

3　展　開

（1）　江戸時代の身分社会と差別の中で生きてきた人々

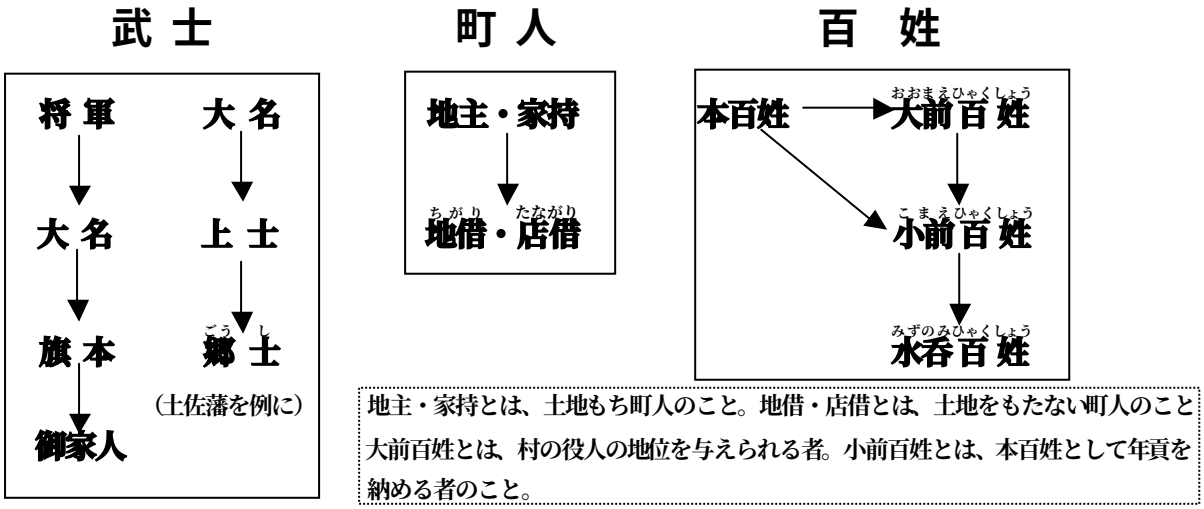
主な学習活動	留意点など
1　これまでの復習 ・幕藩体制を維持するために幕府が行った政策 ・武士の生活が大多数の農民の年貢によって支えられていたこと	○これまでの学習を振り返る。 ・武家諸法度、参勤交代（大名行列） ・年貢をおさめる農民
2　資料1・2を見て江戸時代の身分はどのようなしくみになっていたのか考える。	○資料1　円グラフ(P8) 江戸時代の身分ごとの人口の割合や、武士、町人、村人などとは別に「差別されていた人々」がいたことに気づかせる。 ○資料2　身分の中の上下(P8) ・それぞれの身分の中にも上下関係があったことに気づかせる。 ・身分の固定化により、多の身分に移ることが難しかったことを知らせる。
3　資料3・4を読み、差別された人々は身分制社会の中でどのような存在だったのかを考え、グループで話し合う。	○資料3「真覚寺日記」(P9) ・差別されたのにその相手の命を助けようとしたことや、武士が犬をあずけたりするなどの交流があったことに気づかせる。 ・差別の中で生きてきた人々は、住むところや服装、仕事などに制限があったことや、当時は地域社会の外の存在とされていたことを知らせる。
4　まとめ（感想をノートに書く）	○資料4　お伊勢参り(P9) ・差別が制度化され、差別しなければ処罰されていた時代にもかかわらず、差別に屈しなかった人々がいたことに気づかせる。

資料１　円グラフ



東京書籍　「小学社会６上」　2003 年度版　P57 をもとに作成

資料２　身分の中の上下(江戸時代の身分社会)



地主・家持とは、土地もち町人のこと。地借・店借とは、土地をもたない町人のこと
大前百姓とは、村の役人の地位を与えられる者。小前百姓とは、本百姓として年貢を納める者のこと。

笠原一男　「詳説　日本史研究」　1991　山川出版社

トピック：骨まで有効利用された死牛馬処理

死牛馬の処理は、死穢との関係から忌み嫌われ、処理に関わる人々は周りの人々から賤視されていた。これらの人々は処理した死牛馬を様々に活用し、表皮・爪・角・毛・筋・脂などはそれぞれその用途に応じて使われ、皮の屑は膠(ニカワ)という接着剤とされた。また、肝臓から希に出てくる牛黄(ゴオウ)は、高価な薬品として重宝がられたが、大量に出てくる骨はその処理に困っていた。しかし、薩摩国で海運業を営んでいた仲覚兵衛により、骨を砕いたものに肥料としての効果があることが確かめられ、大量に出てくる骨は、以後「骨粉」として全国に流通するようになる。

【参考】中尾健次　「部落史５０話」　2003　解放出版社
京都部落史研究所編　「中世の民衆と芸能」　1986　阿吽社

資料４　真覚寺日記

１８６５年5月１７日

　ある武士の家の犬がイノシシ狩りでけがをした。牛肉を食べさせればけがも早く治るということで、差別されていた身分の人に、その犬をあずけた。

　やがて犬のケガがずいぶん治ってきたので、その人はあずかった犬を連れて散歩させていた。

　するとそこへ近くの百姓が通りかかり、「その犬はどうしたのか。」と聞いた。「お城下のだれそれよりあずかった犬だ。」とその人が答えると、百姓はおこりだし、「おまえのような身分のものが犬を連れているとはまことにけしからん。」と言うなり犬を打ち殺してしまった。

　差別されていた人が事情を武士に話すと、百姓はさっそく捕まり、手打ちにされそうになったが、その人が、「私が犬をあずかりさえしなければこんなことにはなりませんでした。どうか私をまず罰してください。」と言って百姓を助けようとした。

　そのことばを聞いた武士は、「おまえのような身分のものにはめずらしく、りっぱな者である。」とおおいにほめ、二人とも許された。

「真覚寺日記」より

土佐市立戸波中学校　「真覚寺日記　部落史資料」

参考：真覚寺日記

　真覚寺日記とは、土佐市宇佐の真覚寺の住職が記録していた日記です。日記には、天災や諸外国からの外圧など混乱が続いていた中、市中の噂や街頭の人々の話を聞いた内容で書かれているものです。

資料４　お伊勢参り

　江戸時代のなかばを過ぎたころから、人々の間では伊勢神宮に参拝することがたいへん流行しました。簡単には旅行できない時代だったので、人々にとってはたいへんな楽しみでした。

　１８１２年、京都で差別の中を生きてきた人々も、２１人がいっしょになって、伊勢神宮に参拝に出かけました。

　しかしこのことが見つかり、この人たちはもちろん、この人たちを泊めた宿屋の主人も処罰（しょばつ）されました。

京都部落史研究所編　「京都の部落史１　前近代」　1995　阿吽社

（2）江戸時代の社会や文化を支えてきた人々

主な学習活動	留意点など
1　差別されていた人々が、どのような生活をしてきたのかを考える。 ある村の人口はなぜ増加しているのでしょうか。	○**資料５　ある村の人口増加のグラフ（P110）** 江戸時代全体の人口の変化があまりない中、差別されていた人々の住むある村の人口は増加している。このことから、けっして苦しい生活ではなかったことに気づかせる。
2　差別されていた人々が、どのような仕事を行っていたのか、資料を見ながら話し合う。 差別の中で生きてきた人々は、どのような仕事をしていたのでしょうか。	○あらかじめ、今までの学習から自分の考えられることを予想してノートに書かせる。 ○**資料６　今様職人尽歌合・職人尽歌合（巻末資料５・６）** ○**資料７　土佐国職人尽歌合（巻末資料７）** ○様々なものを作り出す職人 ・死牛馬などの処理から生み出されるさまざまな製品は、社会が豊かになるにつれ、その需要は高まり、たいへん経済的価値があったことをおさえる。そして、それが特権産業であったことを説明する。（人口増加のグラフと関連づける。） ・その他、刑吏、清掃、狩猟、飛脚、運搬、芸能民、流民、堰の番人、庭者、染色業、製薬、薬売り、その他医者などもいた。 ・また、農業や漁業などの仕事をしていた人々もいたが、地域によって違うことをおさえておく。
3　差別されていた人々が、さまざまな仕事をおこない、当時の社会や文化を支える重要な役割を担っていたことを知る。 これらの仕事は、どのくらい役立つものだったのだろうか。	○差別されていた人々の仕事は、当時のすべての人々の生活にとって、なくてはならないものであったことに気づかせる。 ○仕事や住む所など厳しい制約を受けながらも、工夫や努力を重ね、さまざまな仕事を創り出していった人々の姿に出会わせる。 ・武具（武士にとっては戦いに必要なもの） ・太鼓（お祭りや時を告げるために欠かせないもの） ・ろうそく（電気のない当時は貴重なもの） ・雪駄や下駄（ないと足が痛くて歩けない） ・堰の番人（水害にみまわれ命が危ない） ・染色業（さまざまな色の着物が着られる） ・竹細工（農業や漁業、くらしに必要）
5　その当時の文化を支え活躍した人々の技術が、伝統工芸や伝統文化として現代に受け継がれていることを知る。	○現代でも使われている竹細工、太鼓など、実物があれば見せる。
6　まとめ（感想をノートに書く）	